



自動 vs. 手動

ありがたい自動化

とにかく世の中は自動化が拡大している。自動車(オートモビル)というのは、それだけで自動的と呼ばれているが、さらに自動車には自動変速器(オートマチック)がある。昔はタクシーの車はシフトレバーのある変速器を備えていたが、いつの間にかオートマチックになっている。カメラも、昔はせいぜい自動シャッター速度や自動絞りというところだったが、最近では自動焦点が普通となって、フラッシュも暗いところでは自動で光る。昔は下手な写真をピンぼけといったが、これはピンがぼけているという意味だ。今ではすっかり死語である。自動カメラでは焦点をズラして写真を撮影するほうが難しい。

パソコンやインターネットは自動化の代表選手のようなものだが、その中でもさらに自動化の進展がある。たとえばインターネットエクスプローラで中国語やハンガルのウェブのページを見ると、インターネットエクスプローラが自動的に言語を判別して、表示に必要な機能をダウンロードできる。これは在外の日本人が日本語のページを見るときにも便利だ。

迷惑な自動化

便利な自動化が裏目に出てしまうことがある。文章を編集している最中に、英文字の先頭が勝手に大文字になってしまったり、ウェブのURLや電子メールアドレスが自動的に認識されて色が変化してしまったりする。これは便利とも言えるし、余計なお世話となる場合もある。

描画ソフトでは、線や点の配置が方眼紙のます目に限定されてしまうことがある。マウスでいくら引っ張ってみても思うところに定位しない。論文を書くときに使われるLaTeXでは図や表の配置が自動的に計算されるので、思わぬところにズレてしまうことがある。

自動ドアは荷物を抱えているときは便利だが、列車が満員で車両の区切りのところに乗客が立っていると、ほんの少しの体の移動で自動ドアが開いたり閉じたりを繰り返す。

自動とは仕組むこと

まだ改善の余地はあるものの、自動化の技術には感心することが多い。それは人間の行動を予測して仕組んであるから



だ。どのような場合でも予測は難しい。外れることがあっても仕方がない。

コンピュータのプログラムという用語は、まさに事前に(プロ)書いたもの(グラム)を意味する。つまりあらかじめ仕組むのがプログラムの役割だ。

私は大学でプログラムの書き方を教える立場にある。自分でも学生時代からプログラムを書いている。そのような私でも、プログラムを書くのは難しい仕事だとつくづく思う。人間は過去のことを記録したり書いたりするのは得意だ。しかし、未来のことを仕組むのは不得手である。

自動化の技術は、直接にコンピュータを使わない場合でもプログラムのように何かをあらかじめ仕組んである。それが人間の行動にうまく合致すれば便利だが、外れると迷惑になる。

貴重な手動の制御

世の中の万事が自動化されると、残された手動の世界が貴重になる。食品の世界には、手打ちそばがある。衣服でも手縫い、手編みが尊重される。

コンピュータの世界では、あまり手動が珍重されていないと思う。実際には、手動の技が光る場合もある。モデムでの接続はスクリプトで自動ダイヤルするよりも、ATコマンドを人間が操作するほうが話が早い。熟達した人間は操作の途中で何秒も待たずにどんどん先へ進む。

実際に手動が活躍するのは、何か問題が発生した場合だ。自動的に修復するプログラムやシステムも次々に登場しているが、まだまだ多くの場合には人間が手動で回復している。これはパソコンやインターネットに限らない。世の中の問題解決をしているのは、結局は人間なのだ。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社**インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp